

提

言

地域を活性化するための発想の転換(廃校活用)

株式会社マイナビ地域創生

代表取締役社長 よこお たかよし
横尾 隆義



1 2年目の夏を迎えた「ちょうなん西小」

私たちマイナビ地域創生が運営する廃校を活用した宿泊施設「仲間と泊まる学校 ちょうなん西小」は、オープンして2回目の夏を迎えた。この夏も小中学生のスポーツ合宿や高校生の勉強合宿、大学生のサークル、ゼミ、社会人の企業研修など、様々な用途で利用いただき、連日宿泊者のみなさんの笑い声が校舎中に響き渡っている。リピート利用も増えて「お帰りなさい」と出迎える機会も増えた。そうやってお客様を迎えることができるのは、施設を運営する私たちの喜びである。

2 マイナビが地域創生に挑戦する理由

「なぜ、就職、転職、アルバイトなどの求人や、結婚、賃貸、トラベルなどの情報サービスを主力とするマイナビが宿泊施設を運営するのか。どうして地域創生を手掛けるのか。」このプロジェクトをスタートしてから何度も聞かれた。日本の地方は今、新しい生活環境の整備、地域づくりの在り方が求められている。全国各地で人口減少が始まっている中で、これからも、その土地とそこに住む人々が輝くために、地域に雇用を生み出し、今後も持続的に発展していくコミュニティの創造に寄与することと、人と人とのつながりを作ることがマイナビの役割だと受け止めている。

3 地域の宝を発掘する

どのような方法で地域の活性化に寄与していくか。どうすれば土地の魅力を発信できるのか。その視点に立って、「ちょうなん西小」が立

地する長南町での活動は始まった。私たちは始めから「廃校ありき」ではなかった。「廃校をどのように活用するか」がスタート地点ではなく「長南町を活性化する効果的な方法」を検証した上で、結果的に「廃校を宿泊施設にする」という手段を選択した。

千葉県長生郡長南町は、房総半島の中央部にある人口8千人の町。近年、東京湾アクアラインと圏央道がつながり、都心部からも90分と交通アクセスが向上したが、内房から外房への通過点と位置付けられてしまうのが現実で、際立つ特長を表現しにくい町だった。けれど、この町にしかない、かけがえのない宝「ありのままの自然の姿」があった。今でも初夏にはホテルを觀賞できるなど、まだまだ手つかずの自然と里山の風景が残る。町民のみなさんは口々に「何もない町」と言うが、私はそこに価値を感じた。何もないからこそ存在する里山の姿。それは何よりも代えがたい「町の魅力」である。それを都心部に住む方々に感じてもらえる方法は何か。私たちが出した答えは、旧長南町立西小学校を宿泊施設にリノベーションすることだった。

4 ちょうなん西小に込めた想い

卒業校を示す母校という言葉がある。「ちょうなん西小」は、ここに集う全ての人の母校でありたい。全国どこでも、学校は地域の中心にあってほしい。特に小学校は、私たち日本人に共通する心の拠り所であり、そこはいつでも帰って来られる場所であるべきだと考えた。「ち

ょうなん西小」を、地域の方々も、利用者も、かつて小学生だったすべての人が帰って来られる場所にする。そのために、校舎を宿泊利用者だけのものにしないで、町民のみなさんもいつでも気軽に立ち寄れる場所にするのが、私たちが最も重視した点である。

「ちょうなん西小」の最大の特長は「自由であること」に尽きる。今、現役の小学生が通う学校のなんと制約の多いことか。集団生活に決まりごとは必要と言うものの、ここでは思う存分自分たちのルールで楽しんで過ごしてほしいと考えた。

5 ちょうなん西小の「自由」

「自由」な空間と時間を提供するために「ちょうなん西小」は宿泊者を一日一組限定にした。最大84名が宿泊できる施設だが、校舎はもちろん、グラウンドも、体育館も、自分たちの仲間だけで独占できる。また、町民の方々のためには、図書室を開放し、キッズルームとベビールームを新設したほか、以前は職員室だった部屋をカフェに改装した。カフェは連日、子育て世代のママたちや、近所のお年寄りの会合などに利用していただいている。

6 「自由」に向き合い、考える場所

現代を生きる日本人は「自由」を苦手になっている。「自由」な状況に置かれたとき、その「自由」を持て余してしまう。「計算式」を用いて答えを出すことは得意でも、与えられた「自由」の中で、自分なりに「計算式」そのものを作ることが得意ではない人が、特に若者に多い。私のところには、新規事業に取り組みたい、起業したい、と若者が相談に来るケースが後を絶たないが、彼らは環境や条件という「計算式」が与えられなければ、解を出す（＝動く）ことができない。無から有を生み出すこと。自分の手でオリジナルの「計算式」を作る。自らがルールを決めて、枠組みを見いだすことは、新しいチャレンジに必要な資質であり、楽しみや醍醐味でもある。

私たちは長南町に「ちょうなん西小」という

「自由を体験できる器」を作り、新しい「計算式」を提示したと自負している。異なる表現をするならば「ちょうなん西小」は、かつて日本のあちらこちらにあった「原っぱ」だ。原っぱの真ん中に立って、つまらないと途方に暮れるか、何をしようかと考え、動き出せるか。ここでは誰もがやんちゃなトム・ソーヤであり、ドン・キホーテであってほしい。一人一人が主人公になって、アイデア次第でどこまでも楽しい空間と時間が広がることを実感していただきたいと願っている。

とは言え、自由に表現してよいと真っ白なキャンバスを用意されても、絵を描き始めることが難しいのも事実だろう。利用者それぞれに個性的な絵を完成してもらうために、私たちは校内にヒントをちりばめた。そのヒントをきっかけに、スポーツで汗を流すのはもちろん、学校全体を使った鬼ごっこや肝試し、キャンプファイヤーや音楽フェスティバルなど、運営する私たちの想像を超えた新しい「計算式」が次々と誕生している。「ちょうなん西小」というワクワクするフレームの中では、時には脱線することがあってもよい。家庭や学校、会社では許されないことでも、ここは「経験」として許されてもよい場所なのだ。

7 学校の面影を継承していく

「ちょうなん西小」は、盆おどりや、ハロウィン、映画会をはじめ、卒業生が宿泊する機会を作るなど、地域に開放するイベントを定期的で開催している。その場で、地域の方々と話すと“西小自慢”をされることが多い。一人一人の心にそれぞれの西小があるのだと実感する瞬間だ。私たちは、宿泊者も西小の卒業生と考える。ここを巣立っていったすべての人の思いを受け止め、大切に運営していくこと。それが、私たちマイナビ地域創生の責務だと考え、今日も「ちょうなん西小」の新入生を迎え入れる。